

中井正一と思想の科学研究会に関する研究序説

——思想集団の継続性と断続性に着目して——

後藤 嘉 宏

はじめに

戦前映画を射程に入れた美学者として活躍し、戦後国立国会図書館副館長を務めた中井正一（1900-52）は、鶴見俊輔を中心にした思想・運動集団、思想の科学研究会と密接なつながりがある。ちなみに本号でその退職を記念する田村紀雄もこの研究会に積極的に携わり、会長も務めた。

中井自身は思想の科学研究会会員ではなかった。思想の科学研究会ができたのが1949年、中井が没したのが1952年で、時期的にも僅かしか被らない。

しかし以下の三点から両者のつながりを要約できる。まず第一に思想の科学研究会の実質的なリーダー鶴見俊輔と中井は何度か面識があった。第二に、中井が戦前、実質的に主宰した同人誌『美・批評』『世界文化』のメンバーのうち、何人かが思想の科学研究会の主要メンバーと重なっているし、彼ら以外にも中井の友人で会員の者は多くいる。第三に、鶴見自身をはじめ武谷三男、久野収、鈴木正、私の叔父稲葉誠也、私の亡父後藤宏行等、多くのメンバーが中井を論じた。また雑誌『思想の科学』も中井の特集号を企画し、一時期だけであるが、中井正一賞を創設した。

したがって中井の実践と思想の科学研究会の活動とは似通ってくる。しかし当然時代状況も与えられた課題も両者では違うことから、異質な面も生じる。その異質性の最たるものとして本稿で挙げるのは、商業ジャーナリズム、特にスターダムの側面である。しかしその異質な面も中井理論に内在する矛盾に胚胎する部分がある。そこで本稿では、中井を通じて思想の科学研究会をみると同時に、思想の科学研究会から中井を照らすこともめざし、将来の研究に備えた素描を試みたい。

1. 中井正一と思想の科学研究会の関係

鶴見俊輔は、『中井正一エッセンス』（こぶし書房、2003年）に併せて出された、リーフレット誌『場』に「源流にいた人」という一文を寄せている。思想の科学研究会の創設期、鶴見は武谷三男に雑誌『思想の科学』の方向性について相談した。するとマルクス主義者の

中井正一と思想の科学研究会に関する研究序説

武谷が「共産党にふりまわされない雑誌がひとつあってもいいではないか」（鶴見 2003）と答えたという。

マルクス主義者である武谷がなぜこのような立場をとるのか、鶴見はそのときは分からなかった。だが、のちに武谷が『世界文化』同人であり、リーダーに中井という人物がいたことを知ったという。

ここで鶴見は中井を「源流」と位置づけるが、それはおそらくは二つの位相で捉えられる。一つは武谷の例のように、中井の主宰した『世界文化』の同人が思想の科学研究会に加わったという、人脈上のことである。二つ目は、そのことと関連するが、マルクス主義、ハイデガー主義など、個々のメンバーが各自固い核となる思想を基盤にしながらも、互いに多様性を容認する思想集団を中井は形成し、その集団経営の方法論を思想の科学研究会が引き継いだ点である¹⁾。

まず第一の点からみていこう。

思想の科学の創設メンバーは、鶴見と姉和子、武田清子、武谷三男、都留重人、丸山真男、渡辺慧の7名であった。

このなかで、武谷は中井が実質的に主宰した同人誌『美・批評』『世界文化』のメンバーである。またのちに思想の科学研究会に加わった久野収は『世界文化』の合評会で司会役を務め、中井が質問の口火を切るという具合に、中井の補佐役を果たした後輩である。また中井の没後、中井の著書『美と集団の論理』（中央公論社）の編集をし、『中井正一全集』（美術出版社）において名前を表に出す唯一の編者となっている。

また武谷、久野以外にも、『世界文化』同人の和田洋一、新村猛、真下信一も会員で、梯明秀、桑原武夫など中井の友人も会員になっている。

第二点の方に関しては、再び鶴見の「源流にいた人」をみてみよう。鶴見は中井に直接出会った際の印象を、次のように端的に表現する。「人柄も明るく、大きく、相手の話をよくきき、自分の考えの中に受けとめる、珍しい学者だった」（鶴見 2003 3）。

このように鶴見は中井の懐の大きさを、中井の学者らしからぬ個性として、特筆する。1959年の論文「思想の発酵母胎」においても、鶴見は中井の大きな包容力を、「思想の発酵母胎」と表現し、サークルリーダー的な能力、あるいは編集者的な能力に譬えようとする。鶴見は中井の代表的論文「委員会の論理」を、思想の発酵母胎となるコミュニケーション観を唱えたものであると評する。つまり自分の見解を直接無媒介に伝えるよりは、他者の意見に傾聴し、そこに修正を加えることで、他者の思想を「発酵」させるのを手助けするコミュニケーションの理論が、「委員会の論理」に示されているという。おそらく鶴見は、この評価の延長上に中井の『土曜日』『世界文化』の活動や、それらの後継ともいえる思想の科学研究会も位置づけようと試みているようである。

実際、中井は京都哲学会の学会誌『哲学研究』の編集を深田康算から委嘱され、さらに同

人誌『美・批評』『世界文化』を同人の中心として手がけ、そのかわりで隔週刊新聞『土曜日』の刊行を行った。つまり戦前の彼の活動は広い意味での編集者的な実践であった。そこで次に中井のコミュニケーション論を編集者的側面という点からみてみよう。

2. 中井の編集者的なコミュニケーション論

中井のコミュニケーション論を考える前提として、まず彼のメディアム、ミッテル両概念について触れておく。基本的にミッテルが送り手・受け手の対等なコミュニケーション（媒介）を意味するのに対して、メディアムは、送り手が優位に立つコミュニケーションを意味する。そこで話し言葉はミッテルの媒体、会話はミッテルの媒介となる。他方、書き言葉とそれを操る知識人の媒介はメディアムの媒介である。さらに本などの書き言葉が連ねられた媒体は、メディアムの媒体（媒介物）となる。他に理論、思想、記憶などがメディアムの媒介物となる。ここで「書き言葉」、「話し言葉」と通常の表現をしたが、中井の「委員会の論理」においては、それぞれ「書かれる論理」「言われる論理」と論理の様式のレベルで捉えられる。さらにその二つを弁証法的に止揚したものとして「印刷される論理」が想定される。

このメディアム、ミッテル両概念の対立については中井理論の骨格を性格づける問題として、日本新聞学会（現、日本マス・コミュニケーション学会）ではうけとられてきたし、本稿もこの概念を巡る議論で話を展開していく。これらの議論の端緒を開いたのは稲葉三千男である。稲葉は1969年の論文「中井正一の“媒介”論」において、中井にはメディアムの媒介からミッテルの媒介への志向が一貫してあったと指摘する（稲葉1987）。稲葉のいうように、中井は「メディアムからミッテルへ」と多くの著作で盛んにいっていて、知識人は自らの本や理論から抜け出て、自分の思想を同僚さらには大衆との討論に付し、さらに実践へと赴けというのが、この「メディアムからミッテルへ」の趣旨といえる。他方、杉山光信は1975年に著した「言語・映画の理論と弁証法の問題」で、中井には両方の志向があり、最後は「メディアムに支えられたミッテル」がめざされたといい、稲葉を暗に批判する（杉山1983）。さらに北田暁大（2004）は稲葉の主張の延長上に自らの論を展開する。私は、後藤（2005）において基本的に杉山（1983）に分があるとしたが、中井の執筆時期による見解の相違と併行して、ジャンルによる相違も大きいと考えた。さらに三木、キルケゴールの影響の下、中井がシュパンヌングの弁証法に着目したことが、彼の転換の背景として想定されると主張した。

中井は「委員会の論理」の「言われる論理」で、ソクラテスの弁証法を想起している（中井1981a 47）。ソクラテスと弟子との間には師弟関係はあるものの、師が弟子に一方向的に語るのではない。対話による双方向的なコミュニケーションがなされ、相互啓発がなされる。中井はこの双方向的なコミュニケーションを、ミッテルの媒介、要するに弁証法の媒介とみなした。彼の様々な実践活動は全体として理解すると、基本的にはこのミッテルの媒介に属

する。そして基本的に1.で触れた鶴見の指摘する「思想の発酵母胎」としての編集者的なコミュニケーション論は、ミッテルを実践することで成立する。

この「言われる論理」の対等なコミュニケーション、すなわちミッテルの媒介を中井の生涯で最も強く実現したのは、隔週刊新聞『土曜日』の実践であった。これは読者の投稿によって成立する新聞という点で、送り手と受け手の垣根を取り払っている。特に大部屋俳優斎藤雷太郎の『京都スタジオ通信』を引き継ぎ、中井や能勢克男ら京大卒の人物と、小学校卒の斎藤とが共に編集の任に当たった点でも、双方向的なミッテルを実現した活動であった。ソクラテスが街中に出てアテネの市民に論争を挑んだ姿に、これは相当する。

また『土曜日』と同時期に行われた同人誌『世界文化』の実践も、リーダー格の中井と他のメンバーとの相互のやりとりによって成立していた点で、双方向的なミッテルの媒介が成立していたし、ソクラテス師弟のやりとりに近いものがあるといえる。

次に「委員会の論理」の「言われる論理」以外の2つの論理、すなわち「書かれる論理」と「印刷される論理」にも論及しておく。

「書かれる論理」は、中世の写本を典型とするコミュニケーションの論理である。写本は基本的に一義的な解釈を強要する（中井 1981a 52）。教会が文字と知識を独占し、聖書解釈の権利を独り占めにする。そこで写本は送り手優位のコミュニケーションをする媒体となる。

「印刷される論理」は、以上みてきた「言われる論理」と「書かれる論理」を弁証法的に止揚したものである。つまり書き言葉が記された本は、基本的にはメディウムの媒体であるが、それは印刷され大量頒布される。近代の印刷本においては中世の本である写本とは異なり、送り手優位の状況は消え去る。印刷された本やパンフレットなどの文字は、大勢の公衆の手に引き渡され、彼らの批判を仰ぐ。要するに、写本は一義的な解釈を強要したが、印刷本は自由な解釈の余地が大きい。なぜなら本という書き言葉の世界に対して、その本を巡る相互討論という話し言葉の世界が絡み合っ、この「印刷される論理」の世界は成立しているからである。具体的には『美・批評』『世界文化』という中井が実質的に主宰した同人誌活動こそが、この「印刷される論理」の弁証法的な二重性の成立する場である。つまり同人誌の各論文の書き手は、書いた時点では自己の確信にもとづき、その確信の優位性を信じて論文を記す。その時点ではメディウムの媒介をめざす。だが、ひとたびその確信を示した論文を合評会で発表する段に及ぶと、同人の批判を浴び、送り手優位は崩れ、受け手たる自分の論文の読者の批判を受け入れ、ミッテルの媒介となる。そのようにメディウムとミッテルの相互のやりとり、往復作業が、これらの同人誌の活動でなされていたと考えられる。

そしてこの同人誌活動におけるサークルリーダーの編集者的な役割に鶴見は着目し、「思想の発酵母体」の役割を中井が果たしていたと示唆する。合評会での中井は自分の主張をする役割よりは、どちらかといえば聞き役に廻りつつ、発表者の思想を熟成させる編集者の役割に徹した。つまりそこでの中井は自己否定的媒介をしていた。自己の思想や理論の主張を

極力抑えて、話し手たる同人や投稿者の発言に虚心に耳を傾け、自分を透明な媒介者とする点で、ミッテルの媒介を実践していたといえよう。もちろん中井自身が発表者になることも『美・批評』『世界文化』併せれば少なくともはなかつたであろう。しかし『世界文化』に限っていえば、中井は代表作に数え上げられる「委員会の論理」を3回に分けて連載した他は、書評・映画評などを載せているのみである。

3. 中井のなかの矛盾、断絶

この時期の中井の実践活動にもう一つ『土曜日』の刊行がある。鶴見と山本明が編んだ和田洋一記念論文集『抵抗と持続』所収の論文において、荒瀬豊(1979)は、この『土曜日』と『世界文化』の間には断絶が存在すると指摘する。『世界文化』と『土曜日』は、人脈的にも方法的にも異なっているという(荒瀬1979 146)。『世界文化』は前衛党の主導を容認し、書き手も読者も知識人のみが対象であった。他方、2.でも先述したように『土曜日』は読者自身が書き手になる新聞をめざした。

しかし私は、異質性を抱えつつ、『土曜日』も「委員会の論理」の「印刷される論理」をもう一つの形で実践したという面をまずは強調したい。つまり書かれたものが受け手の批判に晒され、双方向のやりとりで変化する。『土曜日』では中井は巻頭言を頻繁に記すなど、送り手としても振る舞った。『世界文化』では彼は編集者的な役割を發揮し、聴き手的な媒介者であったのに対して、ここでは編集者として読者の投稿を受け付けつつ、自分自身の主張を巻頭言等で記していく。つまり「意味の拡張方向ならびにその悲劇性」(1930)の表現でいうと(中井1981a 267)、『世界文化』の場合、「確信」をもち「主張」への意志を胎動させるのは同人で、それに賛同したり批判することで量的拡張し、「主張」に至らせるのが中井や発表者以外の同人である。他方『土曜日』の場合、「確信」をもつのが中井自身であり、それに賛同したり批判したりして量的拡張をし、「確信」を相対化して「主張」に至りうるか否かの権利を有するのは、むしろ一般読者になる。

このように中井の『世界文化』『土曜日』は同時期の実践であり、なおかついずれも「委員会の論理」の「印刷される論理」の実例といえる。その点で両者は一貫している。また久野取は「『世界文化』は、『土曜日』に協力執筆者のプールを提供」(久野1975 187)したとも証言している。しかし荒瀬(1979)のいうように両者の実践を一つに捉えるべきでないのも真実で、『世界文化』同人の武谷(1962 248)も和田(新村ほか1975 35)も、回想のなかで、自分らは『土曜日』の意義を当時測りかねていたと証言する。

いわば中井のミッテルの媒介を同人レベルに留めたのが『世界文化』であり、そこではファシズムへの抵抗線として自由主義者の中井が、マルクス主義者の真下信一らもうけられたような、思想的多元主義がみうけられる。他方、ミッテルの媒介を同人以外にまで広げたのが『土曜日』である。『土曜日』の実践は、思想の形をなす前の言葉から思想を紡ぎ出して

いく試みであった。京大卒の知識人の中の思想の多様性をめざした『世界文化』に対して、学歴を問わずに人々の中の思想と思想以前のもも含めた多様性をめざしたのが『土曜日』である。いわば前者が水平的多様性であるとするれば、後者は垂直的多様性であるともいえよう。その意味で両媒体はミッテルの実践、「印刷される論理」の具体化という点では共通しているが、それを学歴エリートの同人の間にのみ留めたのが『世界文化』であるのに対して、ミッテルの媒介をよりラディカルに具現し、学歴差までをも取り払ったのが『土曜日』であるといえる。そこでは大衆を啓蒙するという以上に、大衆から学ぶという姿勢が窺われた。

この中井の二つの試みは官憲の弾圧によって一挙に終わりを遂げたが、戦後の中井が尾道の文化運動に賭けたものは、いずれの実践を引き継いでいるのかという評価が今後必要となる。長田（1995 405）や木下（1995 185）は戦後の中井の書くものに分かりやすい短文がふえていることをとりあげて、戦後中井がますます大衆のなかに入っていったと評価する。つまり『土曜日』の実践の延長上に戦後の中井を捉える。しかし後藤（2005）でも記したように、私は暫定的にはあるが、その評価には疑問を抱いている。それは杉山（1983）も自らの立論の根拠としてとりあげている、中井の「農村の思想」（1951）の以下のフレーズが引かれるからである。「〔農民には〕……思想としての体系的基盤が欠けているのである。すなわち「思想」ということにふさわしい地盤、媒介（メディアム）が、魂の中に未だ成立していないのである」（中井 1981b 151）²⁾。つまり中井は尾道で何らかの挫折があったために、大衆から学ぶという『土曜日』の方法を忘れ、大衆を啓蒙する方向に転じていったと考えられる。その意味で、知識人志向の『世界文化』と大衆志向の『土曜日』の矛盾は、戦後の中井によって大衆志向の方が選ばれていったのは事実であるが、大衆は学びの対象から啓蒙の対象へと変わり、中井のミッテル志向も基本的には杉山（1983）のいう「メディアムに支えられたミッテル」へと転じたといえよう。つまり『土曜日』において知識人の思想や理論を中井は否定し、書かれた理論や思想よりも生きた実践を求め、ミッテルを唱えてきたが、没年の前年にあたるここに至って、「体系的基盤」、座標軸としての思想が農村の大衆にも必要で、それが彼らに欠けていると考えるようになったのである。

4. 中井の矛盾と思想の科学研究会

ここで思想の科学研究会が、この矛盾する中井像のいずれを引き継いだのかを考えたい。まず本稿 1. でも示した通り人脈的には『世界文化』をうけついでいる。ところが方法はむしろ『土曜日』の方に近い。『土曜日』において中井は映画理論家だけではなく、映画制作の現場の人々や勤労大衆との語り合いを通じて、大衆文化の受容と供給の場のまっただ中へと入っていく。それは思想の科学研究会によって、知識人の思想を問う狭義の哲学から、普通の人々の思想を問う社会学などの広義の思想・哲学へと、思想営為の方法上の転換がなされたことにも対応しよう。中井自身は「メディアムに支えられたミッテル」を戦後唱えたと

というのが杉山（1983）の説であり、後藤（2005）は本稿2.で述べた修正を加えた上、基本的にはそれを踏襲したが、戦後の中井が杉山説に近いならば、戦後、中井と思想の科学研究会は逆方向に進んだといえる。

基本的に鶴見（2003）は中井が懐の深い人物であると評している。中井の懐の深さには、本稿3.で記した、そもそもが同質の集団の間で思想の多様性を認めるという『世界文化』的側面と、学歴も出自も異なる異質なメンバーの間で対等なコミュニケーションができるという『土曜日』的側面の、二つが同時にあった。例えば田村紀雄教授退任祝賀会の特別講演「コミュニケーション学事始め」も含めて、鶴見は盛んに学歴エリートの思想が借り物に過ぎないことを批判する。東京高等師範附属小を出て、東京府立高等学校尋常科を落ちこぼれた俊輔を父祐輔はなじる。しかし鶴見祐輔は東大法科を一番で出たのに、太平洋戦争に加担した。その点に鶴見俊輔は拘り続ける。学校秀才は信用できないという鶴見の言葉は、その意味で説得力がある。その点で、思想の科学研究会は『世界文化』『土曜日』の矛盾において、『土曜日』の方を方法的に引き継いでいる団体であるといえる。本稿3.で『土曜日』的な多様性を「垂直的多様性」と表現したが、鶴見は『思想の科学』を「烏合の衆の多元主義」（鶴見 2005b 14）と評し、その積極的意義を認めている。その意味でも『土曜日』の方に近い。

数年前、今は亡き上野博正が主宰した「思想の科学研究会を考える会」という研究会で、どういう訳か会員歴2年の私が報告し、ベテラン会員がその報告を数次に亘り批判し、議論する機会を得た。その概要を、私は思想の科学研究会の総会（1998年4月26日）で紹介、報告した。私の報告内容は、研究会の多元主義と組織の論理の矛盾について以外は、今から思うと、基本的には会の元事務局長の後藤宏行が研究会会報にかつて書いた文章を焼き直したものに過ぎない。その趣旨は概ね以下ようになる。研究会と雑誌は連動していない。雑誌『思想の科学』が研究会の機関誌というのは建前になっていて、実際には研究会のプラグマティズムの多元主義を雑誌は十分に体现していない。さらに雑誌が研究会からジャーナリズムへの登竜門、スターダムとして機能している、と。

その概要報告の際、総会の席にいた鶴見は挙手して反論した。鶴見の発言の趣旨は、『思想の科学研究会会報』に私が書いた「「思想の科学研究会を考える会」の報告」にも記録してある（後藤 1998a; 1998b）が、その趣旨は、概略以下のようなもので、要するに風体と実体とは違うということであった。雑誌『思想の科学』は思想の科学研究会の機関誌であるというのが風体。それに対して会員の機関誌というだけでは雑誌が成り立たないというのが実体である。最初7名で会を立ち上げた頃は、実体と風体は一致していた。しかし人数が増えてから、学校秀才の会員は、デモクラシーにしても何にしても原理が分かれば万事それで終わりなので、風体に拘り、会員が雑誌に書く機会を増やせと迫る。しかし実際には、外の実力のある書き手に雑誌に書いて貰い、書いてくれた人に会員になって貰う形で会員を増やし

ていった。また会がスターダムとして機能したという過去は認めるが、『思想の科学』休刊を機に、投稿者が原稿料を貰うのではなく、むしろ印刷費を負担する『活字以前』が丸山陸男などの会員有志によって刊行され、それによってスターダムからも切り離された。学校を出た人間は事柄の意味を後追的にしか分からないので、この雑誌『思想の科学』から『活字以前』への変化の意味も分からない。それに対して学校を出ていない人間は、動物的な反射で物事を的確に把握する。結局会員で、よい仕事をしたのは、上坂冬子、加太こうじ、佐藤忠男ら、いわゆる学校を出ていない人たちである。雑誌も休刊となり、会の威光にすり寄ってきただけのアカデミズムの不純な分子が消えて、実体に見合った本来の会の姿が取り戻せた。またそれと同時に、個人だけではなく会自身の問題として、折原脩三がかつていったような老年の問題を考える時期となっている。会を社団法人でなくし、丸山陸男の主宰する『活字以前』のような現在の身丈に合った活動をすべきである。

以上要約した風体と実体との違いという鶴見の反論は、説得力がある。しかしそれでは「研究会の雑誌」という風体をあえて作る理由は、鶴見においてどこにあったのであろうか。これは全くの私の憶測であるが、同人が書くにも拘わらず後世から注目される逸材を生み出した雑誌『世界文化』的なサークルへの憧れもあったであろうし、「集団の会」を研究会のなかに組織したのもそういったサークル、同人への思いがあったからであろう。他方『土曜日』のように外に開かれた媒体への憧れもあったであろう³⁾。さらに雑誌『思想の科学』が少なくとも風体上は商業誌ではなく機関誌である点に、商品としての言説とは一線を画すという意味合いがあったであろうし、思想運動としての力もそこに求めたであろう。おそらく『世界文化』『土曜日』の矛盾と、このような思想の科学研究会の状況とは、入れ子になっている。『土曜日』は読者大衆も書き手になり、なおかつ執筆の機会は外に開かれている。『世界文化』は知識人のみが書き手であり、編集後記で投稿を呼びかけることはあったものの、執筆者はほぼ同人並びにその知人に閉ざされている。「思想の科学」（雑誌と研究会を併せてこう表記した）は、外に開かれている点では『土曜日』に近いが、あえて分けていけば、研究会の方に、雑誌を読者層として支える読者大衆が多く、『土曜日』とは逆に、寄稿者の方に、鶴見が個別に知り合った知識人が多かったともいえる。ただし寄稿者としては一般読者からの投稿もあり、その点では『土曜日』の方に近い。そしてこの投稿原稿が評判になると、商業誌から仕事の依頼も来て、スターダムとして機能したことも否めまい。この商業誌的な実体を有するという側面には二点、問題がある。第一に運動体として「思想の科学」を支える人間とスターダムとしてそれを利用する人間とが乖離し、運動にとってのフリーライダーが生じる。第二に雑誌と運動の距離が大きくなり、多元主義を運動そのものは標榜しつつ、雑誌の方はその時々々の流行の思想に染まり易い。

このような商業主義的言説に常に警戒の眼をもって当たっていたのが、実践家としての中井であった。例えば1937年『世界文化』に載った内田穰吉『日本資本主義論争』の書評で

中井はいう。「この戦場日記を読んで第一に感じたことは、この論争が一つの部屋で一つの真実の究明のために、おたがいの瞳に見入りながら為されたものであったならば、……ということである。ジャーナリズムのセンセーショナルリズムにすら乗せられたかと思わるほど、同士打ちの傷は、つぐないがたきまでにその人々の損失となっている」(中井 1981a 389)⁴⁾。「一つの部屋で一つの真実の究明のために、おたがいの瞳に見入りながら為されたものであったならば」というフレーズは、中井の『美・批評』『世界文化』の実践が、同人誌の発刊とその合評会であったことを、想起させる。

中井は戦略としてジャーナリズムからの距離を、意識的にとろうとしたと思われる。もちろん戦前期中井らはまだジャーナリズムからとりあげられるほど知名度がなかったのに対して、戦後中井自身及び中井の後輩たちが著名になり、論壇でめだつようになったという実質上の背景も無視できない。しかし荒瀬(1979 144)が描く『土曜日』の頒布の仕方一つとってみても、中井は言論の商品化の問題に敏感であった。

特に三木清の知的「公共圏」の確立という目標を、中井は中井なりの地に足の着いた方法で実践したと私は考えている。山田宗睦(1975 131)によると、三木は、留学中アカデミックフルに陥っているハイデルベルグ大学の知識人に不満をもち、帰国後、学問縦断的な研究会を京都で開いた。その仲間の中井もいた。さらに各学会誌が事実上学内紀要のような大学学部ごとの学会誌に壟断されている状況を批判し、全国的な雑誌の発刊をめざした。学問縦断と地域横断という目的を叶えるためもあり、羽仁五郎と『新興科学の旗の下に』を刊行する。この雑誌は『プロレタリア科学』に発展して、基本的に商業誌ではないが、全国に彼の名を高めた。また比較的晩年にはジャーナリズムとアカデミズムの結合をめざした。このような三木の学問縦断的な関心は、中井の場合、美学・モダニズム中心の『美・批評』から、滝川事件を経て、哲学的政治的関心の強いメンバーを加えた第二次『美・批評』へと発展する部分にみられる。しかし地域横断的な雑誌を作る代わりに、中井は職能横断的な新聞である『土曜日』を刊行して、大学教員と映画人と京都消費生活協同組合と学生や勤労者をつないだ。つまりジャーナリズムや商業主義から距離をとりつつ、三木の「公共圏」の確立という課題を自分なりにうけつぎ、発展させたのが中井であるといえる。

久野取も指摘するように、中井は年長の友人三木清を常に尊敬した意識していたが(久野 1975 120)、私見では、中井は多分に三木の影響を受けつつ三木と自分とを区別した。その区分の一つの要素項目は、このようなジャーナリズムへの意識であったと思う。

当然三木がジャーナリズムに当初は自ら進んで接近した面もあろうが、教職を追放されたのちは、生活の基盤をそこに求めざるをえなかった点は見逃すべきではない。そして三木と中井の距離は、思想の科学研究会における在野と学界の会員の違いにも対応する。教職にあった後藤宏行の行ったスターダム批判も、そのような生活の糧の問題を考慮すると説得力に限界がある。そして研究会を経済的かつ労力的に最も支える思想の科学社社長に就いたのは

加太こうじ、上野博正、余川典子の3名であった⁵⁾。加太が晩年の一時期大学教授の任にあったものの、基本的に皆、在野の思想家であった。さらに鶴見自身も、京大、東工大、同志社大それぞれに勤めつつも、日米安保条約に抗議したり、同大当局の機動隊学内導入に抗議したりと、様々な契機で辞め、同大教授辞職以降は教職に就いていない。

以上、中井の商業主義批判を実践面から、三木や思想の科学研究会と比較しながら追った。次に以下では中井の商業的言説への評価を、理論面から概観する。中井は基本的に商業主義を否定する。しかし中井は映画の多くが商業的に制作されること、さらに映画を支える情報機器が商品であることは十分に認識していた。あるいは「印刷される論理」に即していうと、印刷物が商品の形態をもって大量に頒布され、多くの人々の批判に供される点も十分に認識していた。商業主義の下にある商品は、方向性が曖昧である。商品であるがゆえの歪みが生じる。そしてそのような歪みは、双方向性があれば多くの批判に晒され、乗り越え可能であるというビジョンを中井は抱いていたように、「委員会の論理」を読む限り、思われる（後藤 2005）。「彼は広島県尾道の商人の家系の一人息子として育ったが、彼は日本の封建的な伝統への抵抗という意味で、町人としてのほこりをもって、商人の意義を評価していた」（武谷 1962 245）。武谷がこう証言する中井であるだけに、「工場の秘密委員会」（中井 1981a 98）の作り出した商品は方向性が欠如しているため歪んでいるが、その商品を審議する民主的な委員会による双方向的討論によって、その歪みは乗り越えうるし、それによって封建遺制を壊す可能性もあると想定していたと思われる。

したがって、そのような彼の理論面での話を商業ジャーナリズムに広げるならば、彼は基本的にジャーナリズム、商品としての言説を批判しつつも、それが双方向に開かれているがゆえに、その商業主義による歪みは乗り越え可能と考えていたとみなしうる。その点で、生家が裕福ではなかったら、あるいは三木のような状況に追い込まれていたら、中井自身、ジャーナリズムに関わることを拒みはしなかったはずである。

そうであるとする、思想の科学研究会と雑誌『思想の科学』との間の、機関誌志向と商業誌志向という矛盾も、単に建前と本音、風体と実体の違いというより、このような中井の理論上の矛盾の延長上にあるとも考えられる。

しかも中井のメディアム、ミッテル関係そのものが、矛盾を孕んでいる。

その問題を考えるためここでは、編集者的な捨て身の機能を改めて考えたい。編集者は自己の主張をせずに聞き役に廻る。つまり緩やかな方向性の提示はありうるもの⁶⁾、自己主張をあまりしないこと、基本的に媒介者の位置に徹することが編集者のあり方であるが、そのような透明な媒介者の責務に専念することが、逆に自己の思想を豊富にし、自己の立場を強固にするという逆説がある。大衆と知識人との対等性を唱え大衆の発言権を認め、聴き手の職務に努めることが逆に自分の位置を強くする。このことをメディアム、ミッテル概念を用いて説明してみよう。

メディアムは媒体（媒介物）としては、理論、思想、記憶、意識、本などであるのに対して、ミッテルは媒体としては行為、無意識、会話など、要するに媒体が意識されない状態であるので、ミッテルの媒介は「無媒介の媒介」、透明な媒介となる。ここで杉山（1983）がいうような「メディアムに支えられたミッテル」とは、本稿3.で触れた「農村の思想」（1951）でいわれるように、理論や思想に支えられ、そのような座標軸をもった上で、改めて思想・理論から行為・実践へと飛躍することを意味する。他方、後藤（2005 371-372）で想定したが、マトリックスでメディアム、ミッテル関係を考えると、杉山（1983）や後藤（2005）が、中井晩年の思想として強調した「メディアムに支えられたミッテル」以外に、メディアムだけの状態、ミッテルだけの状態、それに「ミッテルに支えられたメディアム」が想定される。「相手の話をよくきき、自分の考えの中に受けとめる」（鶴見 2003 3）人物であれば、編集者、サークルリーダーとして自分を空にして相手をうけいれる。その結果、相手の全てが止揚されつつ、自分のなかに蓄積される。いわば中井のいう「民族全体を人造人間としたような、巨人の記憶作用としての図書館」（中井 1981b 273）を一人の人物のなかに作り出す。ミッテルの媒介を徹底させることは、読者大衆と知識人の対等性を実現し、読者大衆に発言の機会を与える。しかも読者大衆に自分の考えを押しつけて啓蒙するのではなく、彼らの奥底に潜む思想を引き出してくるのであるから、徹底的に発言の対等性を実現する。ところが、そのことがかえって受け手に徹した知識人の“引き出し”をふやし、能力を高めるという逆説が、「ミッテルに支えられたメディアム」という概念を創出することでみえてくる。中井や鶴見が大衆や現場の思想に着目したのも、素材の提供者としての大衆への注視であって、結果的にそれらに触れることを通じて豊かになったのは、むしろ素材を理論化する、中井、鶴見といった媒介者の側であった可能性は十分に想定しうる。

ミッテルに徹すると「ミッテルに支えられたメディアム」が高まるという逆説に、中井は気づかなかつたと思われる。「ミッテルに支えられたメディアム」から改めて脱して「メディアムに支えられたミッテル」、そしてまた、ただの「ミッテル」へと戻るには、おそらく忘却が役立つ。だが中井は戦後国立国会図書館に副館長の職を得て、そこで納本制度と官庁資料の組織化に努めたため、また彼は実体概念批判をしたが、その概要は忘却に頼ることで実体概念が成り立っているとの指摘にあったため、中井は忘却の効用は無頓着である。

そしてこのような「ミッテルに支えられたメディアム」という側面は鶴見にもあるが、鶴見の場合、老いの考察のなかから、忘却の効用に着目していて、そこが中井と大きく異なる。あるいは中井も夭折しなければ、鶴見と似た境地になったのかも知れない。

鶴見において学校を出た人間への批判と、毫碌の効用の主張とは表裏一体になっている。例えば『埴谷雄高』（2005）では、秀才と埴谷が対比される。国家によって作られた学校教育システムのなかで、学校秀才は教師の顔色を窺い、国家の望む方向に向かう習慣を身体化する。国家なり社会なりの生み出す知的な要請や流行に、簡単に靡く（鶴見 2005 281）。だ

から学校プロセスにおいて一番であった者は、容易に転向する。その点、埴谷雄高は学校プロセスを超越して1万年のスパンでものを捉えようとしたから、内発的な彼自身の思想の深まりと齟齬のない形で、権力による転向への強制を、権力からも共産党からも距離を置く形で主体的に捉え直すことができた（鶴見 2005a）⁷⁾。そして、そのような内発的な思想は、知識と区別される知恵によって導かれる。しかも知恵は毫碌によって生まれる面があるとされる。「思想というのは偏見ともうろくに支えられている」（鶴見 2005a 278）。毫碌するなかにおいても持続して残されるものこそ、その人独自の方法であり、思想といえる（鶴見 2005a 200-201）。そしてそのような思想こそ、知識と区別された知恵になる。帝大出身を中心とした知識をもつ人々とは異なった、庶民の知恵こそが、転向が強要される時代に、それから逃れる術を与える。加太こうじは特高から取り調べを受けそうになった際、「マルクス、ロシア人」とくり返し鏡の前で練習し、実際特高が来て、マルクスの本はないかと尋ねると、「マルクス？ あのロシア人ですか？」（鶴見・小田 2004 82）と聞き返したという。これこそ知識ならぬ知恵であると鶴見はいう。1998年の総会での、風体と実体との違いを乗り越えるべき時期が来たという鶴見の発言も、その文脈でも理解できよう。老いの問題を会という組織それ自体もみつめ直し、投稿者が原稿料を貰うのではなく、印刷費を負担する雑誌『活字以前』の活動こそ、知識を忘れたあと残る、その人独自の、どうしても伝えたい知恵のようなものと示唆していると思われる。

多分中井と鶴見は同じく京大の専任教員を勤めた知的エリートであるし、大衆との対等なミッテルの媒介を試みる点でも共通しているが、広島高等師範学校付属中、三高、京大と進んだ中井は、鶴見ほどには秀才の枠から抜けられなかったと思われる。山代巴の前で三高寮歌を歌い（山代 1962 272）、真下信一に「三高オンチ」とからかわれる（真下 1965 3）中井である。「一番であることを恥じる」（鶴見 2005a 280）気持ちはなかったであろう。しかも両親との関係も良好で、日本初の帝王切開手術で彼を生んだ母親との深い絆は有名であるし、父親は難手術の成功を喜び、父子ともに一生嘘をいわないと誓い、その誓い通りに、息子を育てたという（荒瀬 1979 149）。それに対して東京高等師範学校付属小のあと、東京府立高等学校や府立五中を不良少年として落ちこぼれ、転校しつつ、二年しか通ってはいえ飛び級でハーバード大を卒業した鶴見は（鶴見・小田 2004 34）、秀才と落ちこぼれを行き来することができた。しかも父親への反撥は日頃から公けにしているが、2005年の思想の科学研究会公開シンポジウム（2005年4月9日、於ペアーレ新宿）では、母親についても、幼少時からの「あなたは悪い子だ」という母の言葉の暴力から、非暴力・無抵抗の精神を自ら学んだと冗談めかして公言しており、その点でも中井とは違う。そのような不良であるだけに、中井の『世界文化』と『土曜日』の矛盾を、『土曜日』に近い形で、あるいはメディウム志向とミッテル志向の両面を、ミッテル志向を徹底させる形で、会を導き、自らを形成することができたといえよう。あるいは「ミッテルに支えられたメディウム」から再び「ミ

ッテル」へと戻る方法を心得えたといえる。

ただしそのような鶴見と中井とのどちらが現代社会に有効な処方箋を与えているのかは、まだ即答はできない。後藤(2005)で私は、中井が「メデイウムに支えられたミッテル」を唱えたことで、より時代の課題に応えられたし、現代社会の問題を十分に予見しえたと言った。他方、中井の忘却への消極的評価については常に疑問を感じており、鶴見の落ちこぼれの思想や毫碌の話をみるにつけ、対照的にここの部分のみは中井を否定的に捉えたい。ただしこの忘却への態度の違いを除けば、「思想の科学」の矛盾は、ほとんど中井のなかに胚胎していたともいえよう。

なお、おそらくは、思想の科学研究会において在野の方法を学び、やや紆余曲折しつつ学問の道に入った田村紀雄も、鶴見同様おそらくは落ちこぼれの眼をもち、知識をこえた知恵を身につけている。だからこそ新聞学の周縁領域であるローカル新聞、タウン誌、日系移民の新聞、電話帳など、他の人の手がけていない分野を開拓する眼力を磨けるのであろう。学会の脇道を歩きつつ、自分なりの脚で稼いだ視点から、学会の主流に思いもかけない光を当ててからこそ(後藤2001)、高く評価される著書をいくつもものにしてきた。

最後に本論攷の執筆目的についてであるが、将来「思想の科学」を研究する目論見はある。しかし私は鶴見俊輔をはじめ亡父のものも含め研究会会員の著作をほとんど読んでいない。肝腎の研究はだいたいあとになる。そもそも上野博正の強い勧めで「『思想の科学研究会』を考える会」に入り、報告をしたが、内発的なものではない。ところがその報告を会報に書いたためか、会員からも学会関係者からも、「思想の科学の研究は進んでいるか？」などと詰問される。しかも、中井と「思想の科学」とをストレートに結びつける人も多いのか、私を「中井正一をやっているんだから『思想の科学』研究の人間だ」と勘違いする人までいる。迷惑千万である。しかしどうせなら迷惑の受けついでに、預言の自己成就で、「思想の科学」研究の序説のみは、研究会元会長の退職記念号を機に中井に引きつけて書いてしまおうと考えた次第である。ただし序説に対する本論は、「思想の科学」自体がある程度世間から、そして私の記憶から、忘却されたあとの方がいいと考えている。同時代史は「木を見て森を見ないこと」になりがちだと研究会のオリジナル・メンバー7名のうちの1人、丸山真男(1976 500-501)は語るが、やはり細部の木を忘れて森がみえるまで待つとしよう。しかも本稿も実質的に中井と鶴見の個人的資質に議論を還元してしまっている。昭和の思想史を考える上での太いタテ糸が「転向」であるとするれば、「ヨコ糸は「小集団」あるいは「サークル」である」(天野2005 283)という思想の科学研究会自体の方法的要請にすら、応えていない。まずは、今の本業に専念し、『世界文化』を中井以外の視点から描き、そのサークルを再現することから始めなければならない。これらの弁も一部からは、怠け者の方便とみなされるであろうが。

注

- 1) 鶴見（2005b）にも同様の発言がみられる。『思想の科学』の編集方針として、多元主義が武谷から提案され、その理由は当時の鶴見には理解できなかったが、武谷が『世界文化』を通じて、学んだものであると後年知ったという。
- 2) [] は後藤の補足。……も後藤記。（ ） はオリジナル。
- 3) 加藤（2005）では、この両面への鶴見の思いが端的に記されている。
- 4) ……は中井記。
- 5) この3名の功労を称える鶴見の発言に依拠して、こう記したが、思想の科学社社長には、他に、久野収、市井三郎、鶴見俊輔、大野力、森山次夫が就いている。それらの社長の時代には、鶴見自身若く、社を支える力があつたし、雑誌の売れ行きも悪くなかつたため、彼らを継いだ3名の労を称えることになつたのであろう。
- 6) この緩やかな方向性の提示は、鶴見（1959）でサークル・雑誌の原理として、議論の継続性のため、その必要性が指摘されている。中井の言葉を使えば「メディウムに支えられたミッテル」の「メディウム」部分に相当しようし、多元主義のなかで方向性を示す組織の原理が、多元主義と矛盾するという後藤（1998a）の「思想の科学」への批判的主張も、「メディウムに支えられたミッテル」という言葉によって説明されえてしまう。
- 7) このように権力にも既成政党にも与さないというのが中井にも共通した姿勢であるし、鶴見（2005）を読むと、コブラの不在の問題（鶴見2005 43-45）や嘘言の問題など、中井が終生追求した事柄を埴谷も共有していたことが分かる。

参考文献表

- 天野正子（2005）『「つきあい」の戦後史』吉川弘文館
- 荒瀬豊（1979）「読者の弁証法 『土曜日』における実験と実践」. 鶴見俊輔・山本明編『抵抗と持続』世界思想社、136-152.
- 稲葉三千男（1987）『マスコミの総合理論』創風社
- 長田弘（1995）「解説」. 中井正一『中井正一評論集』岩波書店（岩波文庫）
- 加藤典洋（2005）「後はやぶれかぶれ」. 鶴見俊輔編・『思想の科学』五十年史の会『『思想の科学』五十年 源流から未来へ』思想の科学社、pp. 15-19.
- 北田暁大（2004）『〈意味〉への抗い——メディアエーションへの文化政治学』せりか書房
- 木下長宏（1995）『中井正一——新しい「美学」の試み』リプロポート
- 久野収（1975）『三〇年代の思想家たち』岩波書店
- 後藤嘉宏（1998a）「『思想の科学研究会を考える会』の報告」（上）『思想の科学会報』144号、社団法人思想の科学研究会、pp. 18-21.
- 後藤嘉宏（1998b）「『思想の科学研究会を考える会』の報告」（下）『思想の科学会報』145号、社団法人思想の科学研究会、pp. 14-20.
- 後藤嘉宏（2001）「（書評）田村紀雄著『電話帳の社会史』（NTT出版、2000年）——新たな研究課題の宝庫」『コミュニケーション科学』15号、東京経済大学コミュニケーション学会
- 後藤嘉宏（2005）『中井正一のメディア論』学文社
- 新村猛・真下信一・和田洋一・辻部政太郎・富岡益五郎・平林一（1975）「《座談会》『世界文化』

- のころ」. 『世界文化』同人編. 『世界文化 復刻(三)』小学館, 15-47.
- 杉山光信 (1983) 『思想とその装置 1 戦後啓蒙と社会科学の思想』新曜社
- 武谷三男 (1962) 「思い出」. 中井正一著・久野収編 『美と集団の論理』中央公論社, 242-251.
- 鶴見俊輔 (1959) 「思想の発酵母胎」『思想の科学』1959年7月号, 30-39.
- 鶴見俊輔 (2003) 「源流にいた人」『UTPADA場』25, 3-4.
- 鶴見俊輔・小田実 (2004) 『手放せない記憶——私が考える場所』編集グループ SURE
- 鶴見俊輔 (2005a) 『埴谷雄高』講談社
- 鶴見俊輔 (2005b) 「はじまりは遠く」. 鶴見俊輔編・『思想の科学』五十年史の会 『『思想の科学』五十年 源流から未来へ』思想の科学社, pp. 11-14.
- 中井正一 (1981a) 『中井正一全集第一巻——哲学と美学の接点』美術出版社
- 中井正一 (1981b) 『中井正一全集第四巻——文化と集団の論理』美術出版社
- 真下信一 (1965) 「中井さんの思い出」『中井正一 2』美術出版社 (『中井正一全集』第二巻付録), 2-5.
- 丸山真男 (1976) 『戦中と戦後の間』みすず書房
- 山代巴 (1962) 「農民運動期の中井先生」. 中井正一著・久野収編 『美と集団の論理』中央公論社, 267-280.
- 山田宗睦 (1975) 『昭和の精神史——京都学派の哲学』人文書院

